

# 永岡遺跡

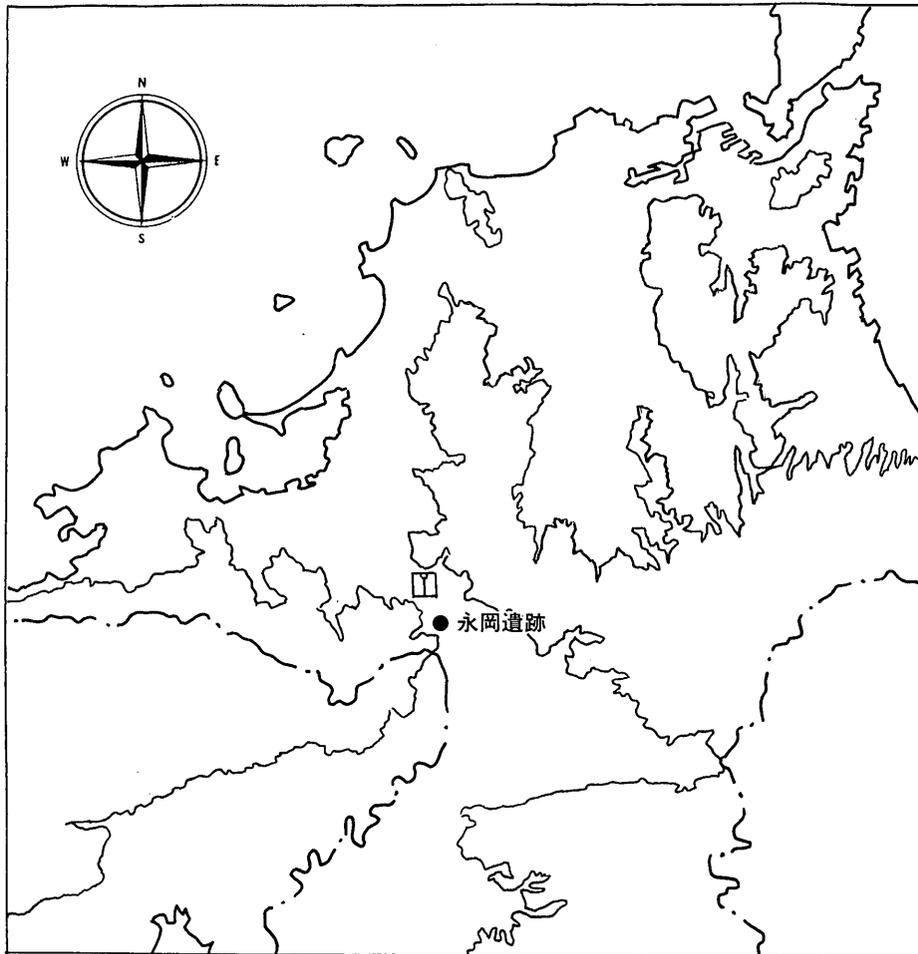
永岡遺跡第4次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書 第73集

2002

筑紫野市教育委員会

なが おか い せき  
永岡遺跡



# 例 言

1. 本書は共同住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. この調査は池田照子氏の委託を受け筑紫野市教育委員会が実施した。
3. 調査対象地は筑紫野市大字永岡929番1・5・6の800㎡である
4. 試掘調査から契約に至るまでの業務は渡邊和子（社会教育課文化財担当技師）が行った。
5. 発掘調査は奥村俊久（社会教育課文化財担当主事）と池松幸路（同技師）が行った。
6. 現地での調査にかかる実測および写真撮影は奥村と池松が行った。
7. 出土遺物の実測は一部について奥村が行い、外は（有）文化財テクノアシストに委託した。
8. 出土遺物の写真撮影はフォトハウスOkaに委託した。
9. 発掘時の遺構番号は遺構単体で完結すると考えられる遺構には、頭にSを冠し番号を付け、単体で完結しないと考えられるピット等の遺構は頭にPを冠し番号を付した。遺物の付番も同様とした。
10. 報告に当たっては遺構の性格付けを行い、墳墓をST、土壙をSK、溝をSD、不明遺構をSXの略号を与え、その後に現場で付した番号をそのまま付した。ピット等についてはそのまま用いた。
11. 本書の執筆、編集は奥村が行った。

# 目 次

I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	1
III 調査の内容	4
1. 溝	4
(1) SD001	4
(2) SD006	7
2. 墳墓	9
ST011	9
3. 土壌	10
SK014	10
4. 不明遺構	11
SX012	11
IV まとめ	13

# 挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)	2
第2図 遺跡周辺地形図 (縮尺 1/2,500)	3
第3図 永岡遺跡第4次調査遺構配置図 (縮尺 1/200)	5
SD001・006土層観察表	6
第4図 SD001・006土層断面図 (縮尺 1/20)	6
第5図 SD006遺物出土状況 (縮尺 1/30)	7
第6図 SD006出土遺物実測図 (縮尺 1/4)	8
第7図 ST011実測図 (縮尺 1/20)	9
第8図 ST011出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	9
第9図 SK014実測図 (縮尺 1/30)	10
第10図 SX012実測図 (縮尺 1/80)	11
第11図 SX012出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	12

# 図版目次

- 図版 1 調査区遠景（西から）
- 図版 2 (1) 調査区近景（北から）  
(2) 遺構配置状況（上空から）
- 図版 3 (1) SD001断面（A-B）  
(2) SD006断面（C-D）  
(3) SD006断面（E-F）
- 図版 4 (1) SD006断面（G-H）  
(2) SD006遺物出土状況（南から）  
(3) SD006遺物出土状況（西から）
- 図版 5 (1) ST011（東から）  
(2) SK014（西から）  
(3) SK014（北から）
- 図版 6 (1) SX012（上空から）  
(2) SX012（北から）
- 図版 7 出土遺物（1～6）
- 図版 8 出土遺物（7～10）

## I 調査に至る経過

平成11年9月9日付けで、池田照子氏から筑紫野市教育委員会に筑紫野市大字永岡929番1・5・6、面積1,861㎡の文化財有無についての照会があった。照会は周知の遺跡の範囲内であるため、教育委員会は同年9月28日と29日に確認調査を実施した。その結果、照会地南半は削平が著しく遺構は確認されなかったが、北半では柱穴や土壌状の遺構が検出された。この結果は9月30日付けで回答を行った。この回答後、池田氏から12月10日に筑紫野市開発等指導要綱に基づく事前協議が行われるとともに、同日付で文化財保護法第57条の2第一項に基づく埋蔵文化財発掘の届出がなされた。教育委員会は直ちに県教育委員会に進達し、翌年1月7日付けで、工事着手前に発掘調査を実施する旨の通知が県教育委員会から到達し、直ちに池田氏へ通知した。池田氏はこれを受けて教育委員会に発掘調査の依頼を行い、平成12年3月28日付けで埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。発掘調査は平成12年4月10日から6月26日まで発掘作業を実施した。

## II 位置と環境

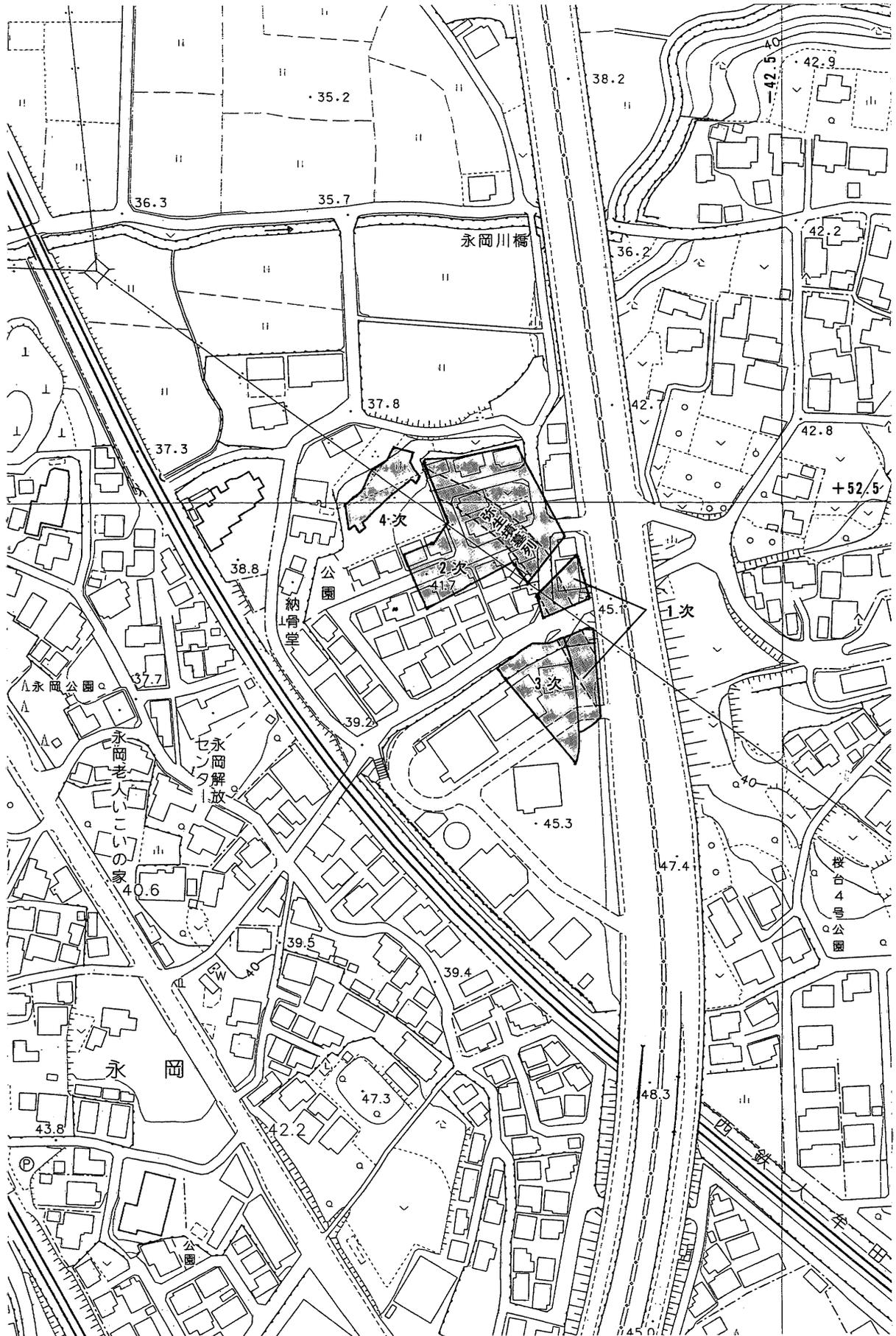
筑紫野市は福岡市と久留米市の間に位置する。西に脊振山塊、東に三郡山塊が迫り、その間に二日市低地帯と呼ばれる狭長な平野部がある。この平野部は北に福岡平野、南に筑紫平野を望み、市域北部は博多湾へ注ぐ御笠川水系の鷺田川流域、その外の地域は有明海に注ぐ筑後川水系の宝満川流域となる。宝満川は三郡山に源を発し、吉木、阿志岐の平野を潤し、永岡付近で九千部山に源を発する山口川と合流し、久留米市で筑後川に濯ぎ込む。宝満川流域には数多くの遺跡が所在するが、中流域は弥生時代の遺跡を中心に濃密に分布する。その中核をなすのは三国丘陵と呼ばれる八ツ手状に延びる丘陵に所在する大遺跡群である。この地域は筑紫野市と小郡市で大規模な区画整理事業が行われ、その事前調査で数々の埋蔵文化財が発見された。筑紫野市側は約52haが調査され、膨大な数の遺構が検出されたが、弥生時代の代表的なものとしては隈・西小田遺跡群第7地点から中細形銅戈23本が出土し、一括埋納されたものと考えられている。また、第13地点23号甕棺では右腕に21個、左腕に23個のゴホウラ製立岩型貝輪を装着した成人男性人骨に、重圏双銘帯式昭明鏡と鉄戈、鉄剣が副葬されていた。第3地点109号甕棺でも熟年男性の人骨とともにゴホウラ製貝輪8個と細型銅剣が出土している。隈・西小田遺跡群の北には以来尺遺跡があり、12,250㎡が調査されている。弥生時代の遺構としては<sup>註1</sup> 竪穴式住居跡が700基を超え、掘立建物98棟、通路等が検出されている。これら三国丘陵とその周辺部の遺跡群の北に、やや広い谷を挟みAso4火砕流台地が広がる。この台地上にも常松遺跡や永岡遺跡など、この地域の弥生時代を代表する遺跡が所在する。

永岡遺跡は台地の北端部に位置し、前面に二日市低地帯を觀る。永岡遺跡は国道3号線福岡南バイパスの建設に伴い昭和45年に最初の発掘調査が行われた。<sup>註3</sup> この調査は別府大学により2月25日から3月25日までと、7月15日から7月31日まで実施されている。この時の調査はトレンチによる遺構確認のトレンチ調査と、確認された遺構の発掘調査が行われているが、調査は福岡南バイパス10号遺跡として取り扱われ、名称として永岡遺跡が用いられる。遺構が検出されたのはE地区のみで、幅3.3mの溝が検出されている。この部分は昭和46年3月調整の筑紫野町遺跡分布図、昭和55年刊行の福岡県遺跡分布図-筑紫野市・春日市・大野城市・筑紫郡編-などで常松遺跡として取り



第1図 周辺遺跡分布図（縮尺1/25,000）

- |          |            |          |          |           |
|----------|------------|----------|----------|-----------|
| 1 大宰府跡   | 2 原口古墳     | 3 野黒坂遺跡  | 4 峠山遺跡   | 5 立明寺古墳群  |
| 6 立明寺遺跡  | 7 竹敷遺跡     | 8 永岡遺跡   | 9 大牟田西遺跡 | 10 大牟田東遺跡 |
| 11 常松遺跡  | 12 諸田仮塚古墳群 | 13 仮塚南遺跡 | 14 貝元遺跡  | 15 トドキ遺跡  |
| 16 以来尺遺跡 |            |          |          |           |



第2図 遺跡周辺地形図 (縮尺 1/2,500)

扱われており、現在、永岡遺跡とされる部分の発掘調査は昭和47年4月6日から6月8日までの福岡南バイパス側道建設に伴う発掘調査が最初となる。これまでに刊行された報告書等に従いこの調査を永岡遺跡の第1次調査と呼ぶ。第1次調査では甕棺墓53基、土壙墓4基、土壙が検出された。土壙で両側を区画された帯状の墓域内に成人棺が2列に埋置され、小児棺は成人棺の墓壙上に付属するように埋置される例が多い<sup>註4</sup>。昭和55年には宅地造成に伴い第2次調査が4月2日から6月7日まで実施された。第1次調査の北側にあたり、甕棺墓99基、木棺墓20基、土壙墓6基、土壙20基のほか中世のものと推定される土壙が3基検出された<sup>註5</sup>。前回調査と同じように、成人棺が2列に南北にやや弧を描きながら並び、これに小児棺が重複する。甕棺の両側には土壙が平行し、1次調査と併せて全長は160m程となる。第2次調査の特出すべきものとしてはSK95やSK100出土人骨に銅剣の切先が突き刺さっていたことである。後者の棺内には石剣の切先も残っていた。青銅製の利器が単に祭祀用に止まらず、实际的に利用されていたと認知させるものであった。さらに昭和63年10月17日から11月12日にかけて第3次調査として第1次調査区の西側を発掘調査し、一連の墳墓群の一部と見られる甕棺墓1基、木棺墓1基、土壙3基を検出した<sup>註6</sup>。今回の調査区は2次調査区の北西に隣接し、3次にわたる発掘調査により確認された帯状の配置を取る墳墓群の北側の延長部に位置する。

#### 註

- 註1 隈・西小田地区遺跡群 筑紫野市文化財調査報告書第38集 1993 筑紫野市教育委員会  
註2 以来尺遺跡II 筑紫野市文化財調査報告書第39集 1994 筑紫野市教育委員会  
以来尺遺跡I 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4集 1997福岡県教育委員会  
以来尺遺跡II 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第6集 1998福岡県教育委員会  
以来尺遺跡III 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第7集 1999福岡県教育委員会  
註3 福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第1集 1970 福岡県教育委員会  
註4 福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4集(図版編) 1976 福岡県教育委員会  
福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第5集(本文編) 1977 福岡県教育委員会  
註5 永岡遺跡 筑紫野市文化財調査報告書第6集 1981 筑紫野市教育委員会  
永岡遺跡II 筑紫野市文化財調査報告書第26集 1990 筑紫野市教育委員会  
註6 永岡遺跡II 筑紫野市文化財調査報告書第26集 1990 筑紫野市教育委員会

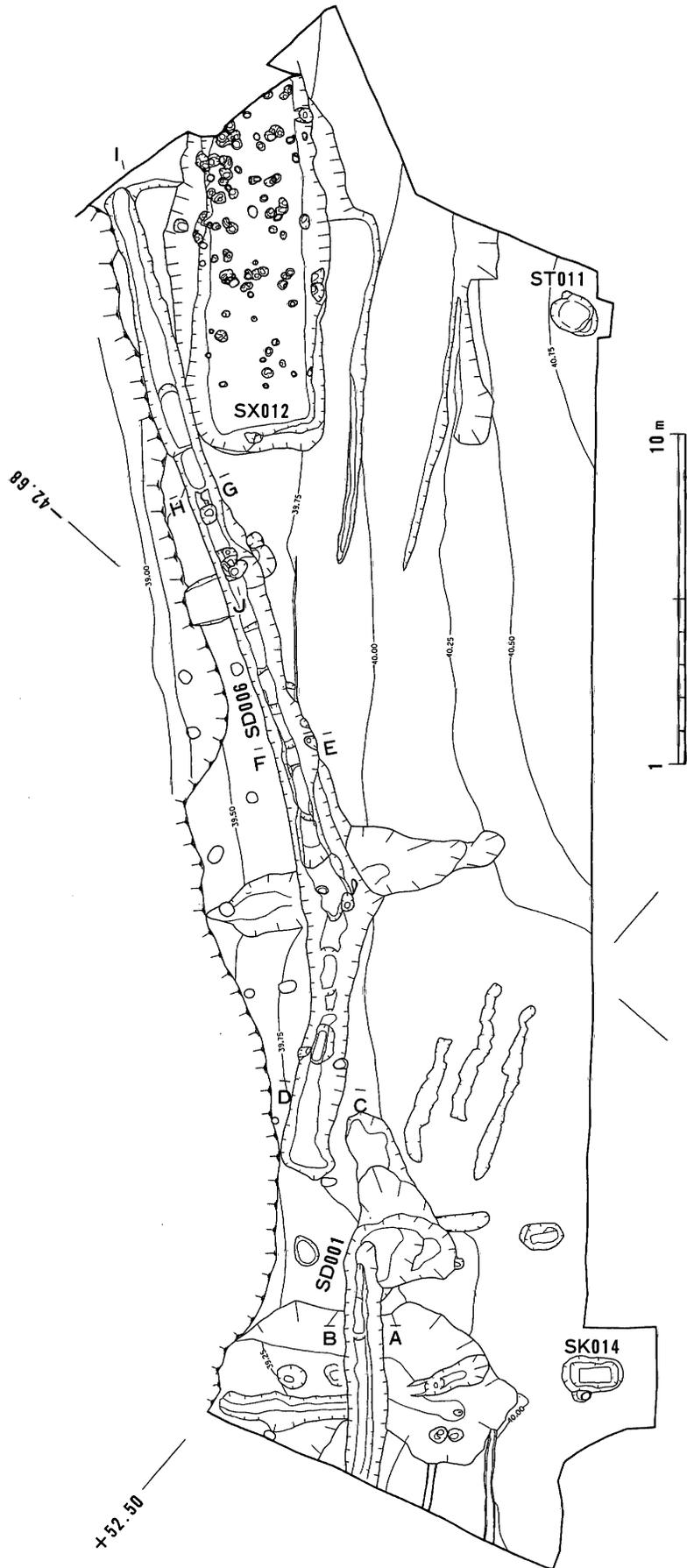
### III 調査の内容

遺構としては溝2条、墳墓1基、土壙1基、不明遺構1基が主な遺構である。単独で存在するピットは古く遡るものはほとんどない。また、SD001、SD006を切って横断皿状を呈す遺構状のものが検出され弥生式土器の細片が僅かに出土したが、浅く、床面も安定せず、遺構検出面の傾斜に応じて遺構の床面も下っていることなどから、遺構ではないと判断した。

#### 1. 溝

##### (1) SD001 (第4図 図版3)

主軸をN-44°-Eにとる溝で調査区の西端部で検出した。幅110~120cmほどで、長さ7m余りを



第3図 永岡遺跡第4次調査遺構配置図(縮尺1/200)

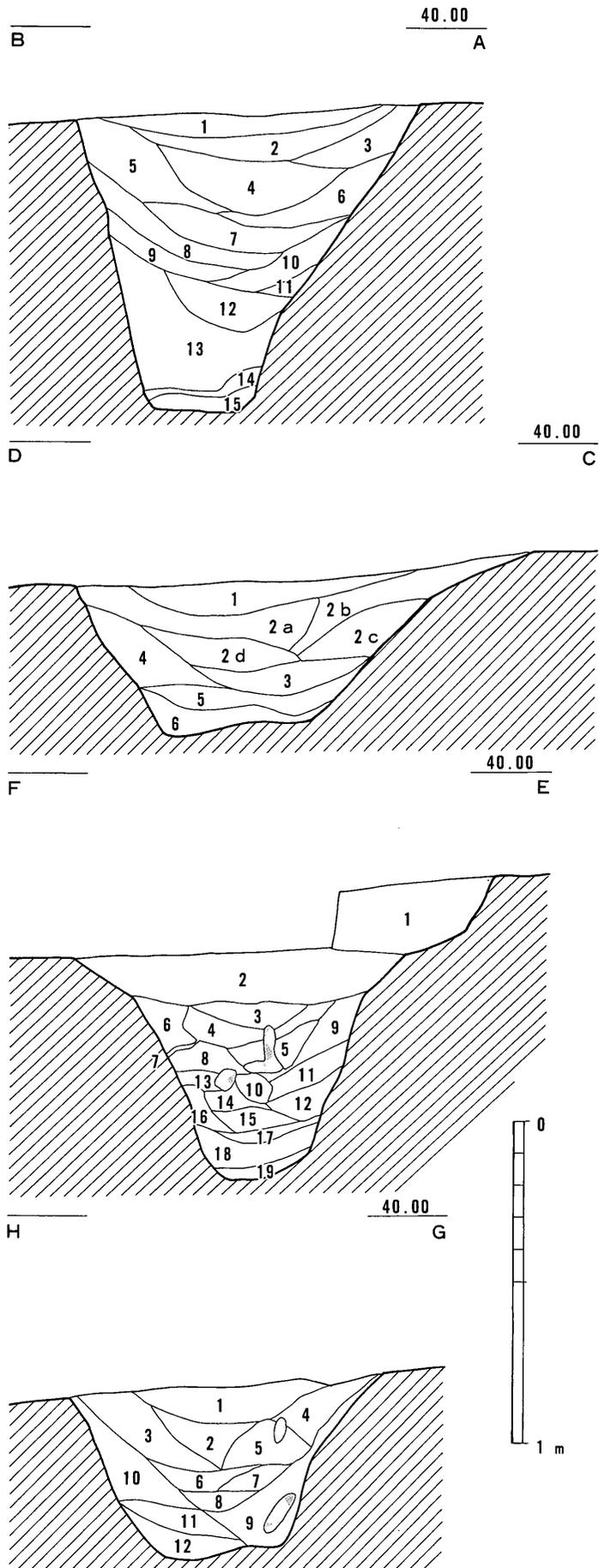
検出し、さらにその先端は3×5.5m程の浅い土坑状を呈す。溝部分は東端で深さ50cm、西端で66cmを測る。全体的に床面は平坦で、北壁はほぼまっすぐに立ち上がるが、南壁は途中から屈曲して上半部は開き気味となる。断面を観察した部分は一段下がり、深さ95cmを測る。

**出土遺物**

遺物は出土しなかった。

番号	色調	色相・明度・彩度
SD001 A-B		
1	暗褐色土	10YR3/4
2	暗褐色土	7.5YR3/4
3	黒褐色土	10YR2/3
4	黒色土	10YR1.7/1
5	黒褐色土	5YR2/1
6	黒色土	7.5YR1.7/1
7	黒色土	5YR1.7/1
8	極暗褐色土	7.5YR2/3
9	黒褐色土	7.5YR3/2
10	黒色土	10YR2/3
11	褐色ローム	7.5YR4/3
12	暗赤褐色土	5YR3/2
13	褐色ローム	7.5YR4/6
14	褐色ローム	7.5YR4/3
15	褐色ローム	7.5YR4/6
SD006 C-D		
1	黒色土	2.5YR2/1
2a	黒褐色土	10YR2/2
2b	黒褐色土	10YR2/3
2c	黒褐色土	10YR3/2
2d	黒褐色土	5YR3/1
3	黒色土	7.5YR1.7/1
4	黒褐色土	5YR2/1
5	黒色土	10YR1.7/1
6	黒褐色土	5YR3/1
SD006 E-F		
1	赤黒色土	7.5YR1/2
2	赤黒色土	10R1.7/1
3	黒色土	7.5YR1.7/1
4	赤黒色土	2.5YR2/1
5	暗赤褐色土	5YR2/2
6	黒褐色土	7.5YR3/2
7	褐色ローム土	7.5YR4/4
8	黒褐色土	7.5YR3/2
9	黒褐色土	10YR2/3
10	黒褐色土	7.5YR3/2
11	暗褐色土	10YR3/4
12	褐色土	7.5YR4/3
13	暗褐色土	7.5YR3/3
14	褐色土	7.5YR4/3
15	黒褐色土	7.5YR3/2
16	褐色土	7.5YR4/4
17	褐色土	7.5YR4/3
18	黒色土	7.5YR1.7/1
19	褐色土	7.5YR4/3
SD006 G-H		
1	赤黒土	2.5YR2/1
2	黒褐色土	5YR2/1
3	黒褐色土	7.5YR3/2
4	黒褐色土	5YR3/3
5	黒色土	5YR1.7/1
6	黒褐色土	7.5YR3/2
7	黒褐色土	7.5YR3/2
8	暗褐色土	7.5YR3/4
9	暗褐色土	7.5YR3/3
10	褐色土	7.5YR4/3
11	暗褐色土	7.5YR3/3
12	褐色土	7.5YR4/4

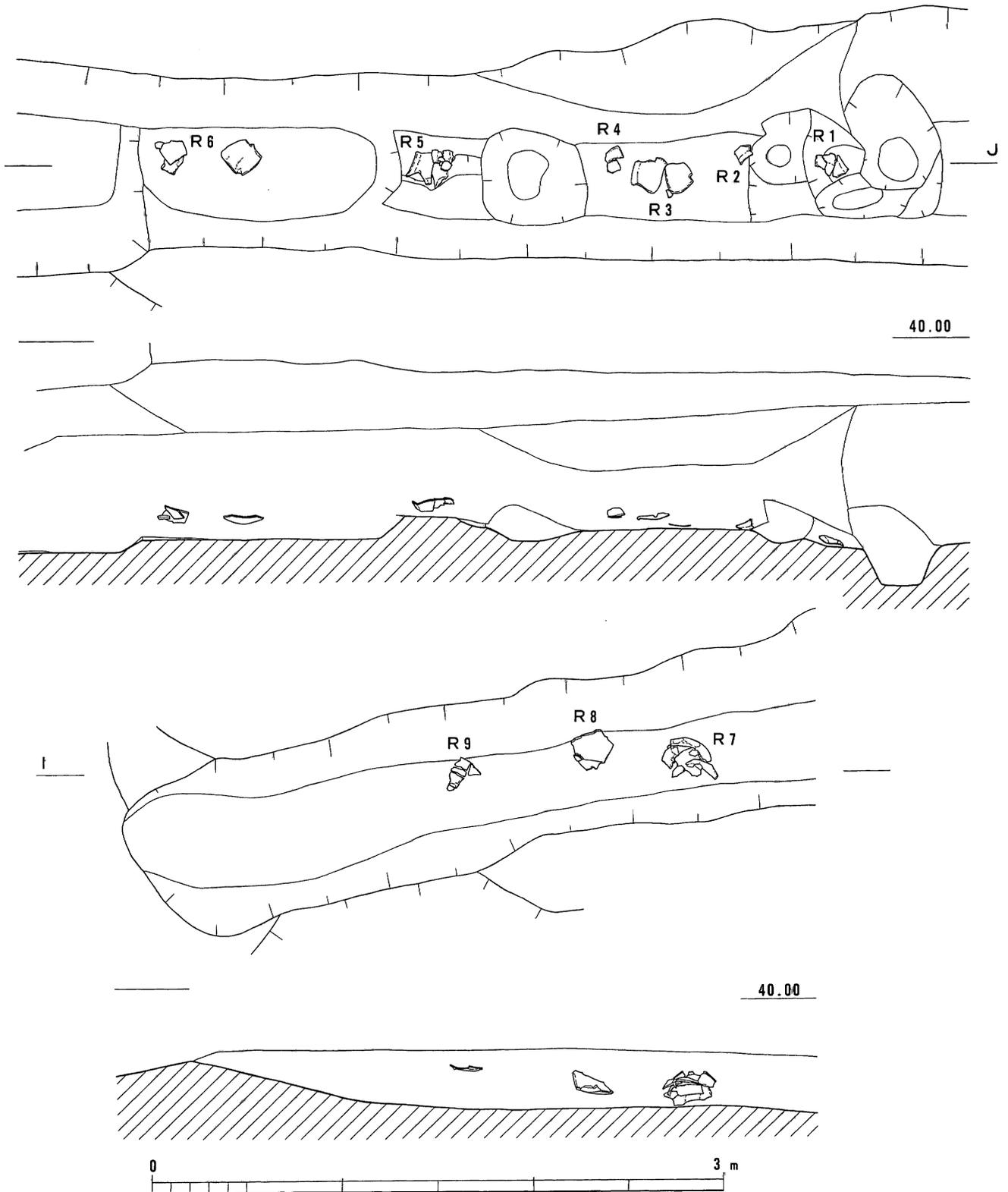
SD001・006土層観察表  
 (色調は日本色研事業(株)発行  
 「新版 標準土色帖」による)



第4図 SD001・006土層断面図(縮尺1/20)  
 (アミ部分は木根跡)

(2) SD006 (第4・5図 図版3・4)

SD001の東側にのびる溝で、長さ22m余りを検出した。溝の西側は主軸をN-57°-Eにとり8m程延び、そこから屈曲して主軸をN-30°-Eにとる。深さは西端で30cm程と浅く、最も深い中程の

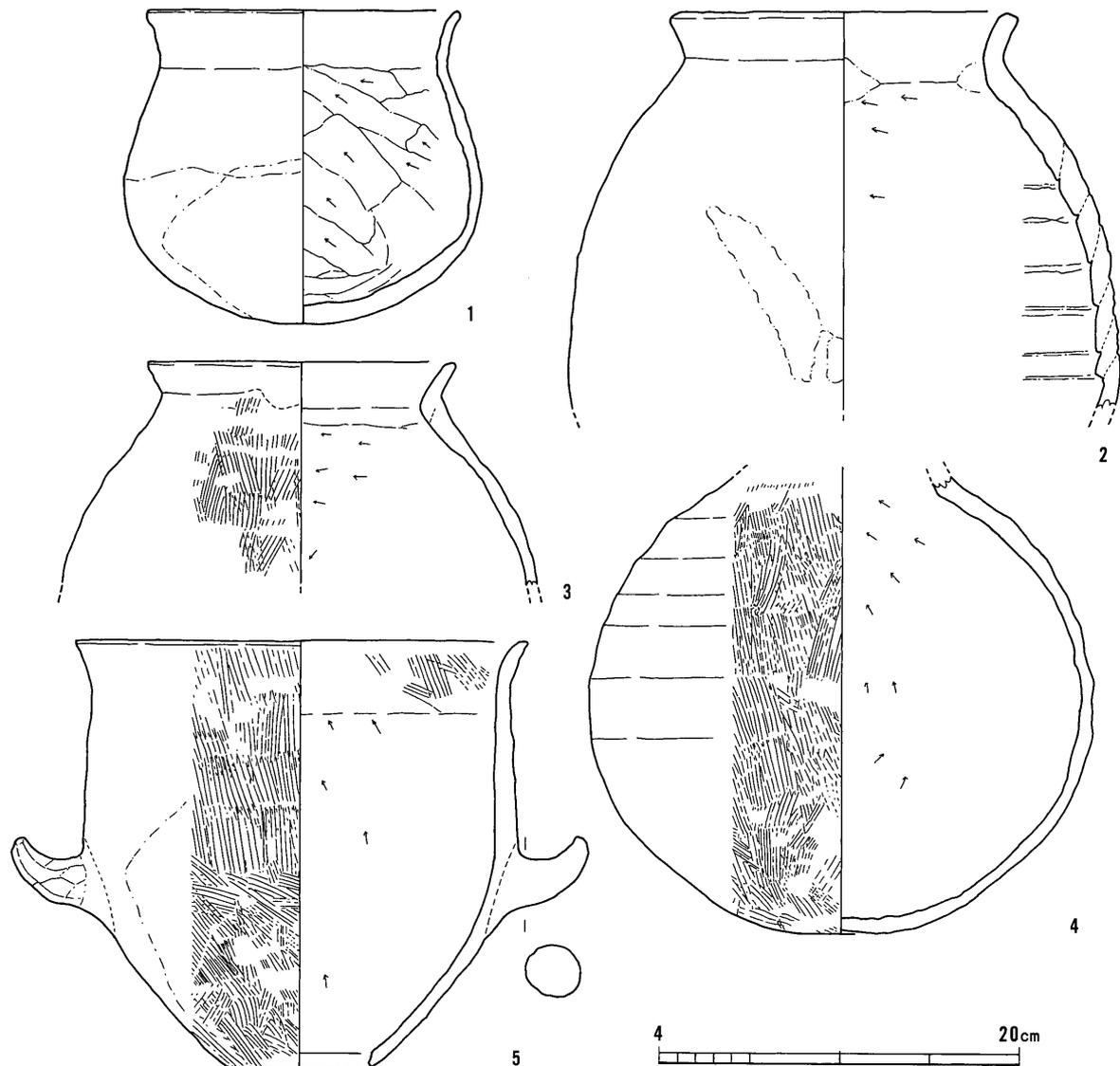


第5図 SD006遺物出土状況 (縮尺1/30)

部分でも50cm程である。さらに東側は徐々に浅くなり、東端は20cm程の残りとなる。床面はピット状に凹凸があるが、それぞれの床は比較的平坦である。

出土遺物（第6図 図版7）

溝の東部分に土器が投棄されていた。いずれも床面からやや浮いた状況で出土した。1は小型の甕でR2~4として取り上げたもので、胴部から口縁部に至る1/2程を欠失する。復元口径17.4cm、器高17.5cm、最大径19.8cmを測る。口縁部はやや外傾し、端部は僅かに外反する。胴部から底部にかけては扁球状を呈すが、頸部屈曲部径が広いため、胴部上半は直線的に延びる。器面は外面がかなり荒れて調整は不明瞭であるが、胴部下半はヘラ削りされ、上半はヨコナデ、もしくはナデが施されているようである。口縁部は内外面ともヨコナデされ、内面頸部以下は強いヘラ削りが施される。最大径下の一部に赤変が認められる。2はR5・6として取り上げた甕で、口縁部から胴部までの1/2程が出土した。復元口径19.2cm、残存高22.2cm、残存最大径30.6cmを測る。器壁は厚く、重量感がある。口縁部は短く外傾し、胴部は全体に丸みをもつが、中位部分は平坦な面をもつ。器面は内外面とも荒れ、調整は明瞭ではない。口縁部はヨコナデされ、胴部上半部にはヘラ削

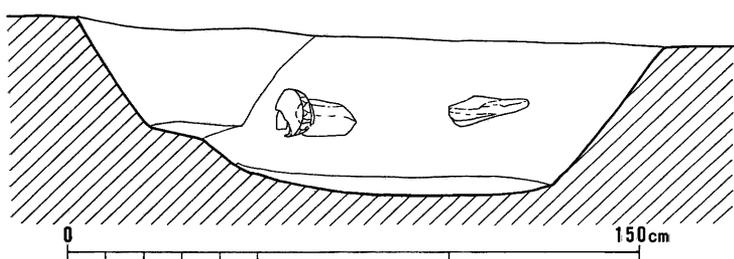
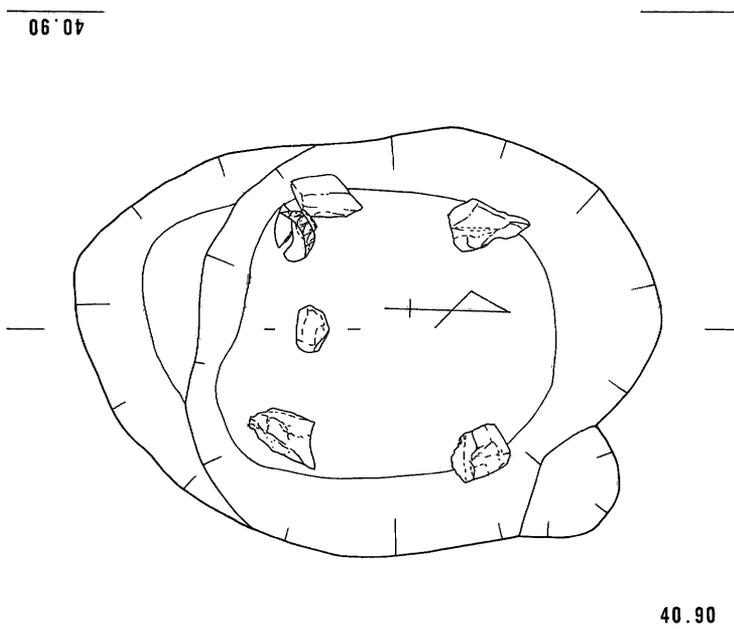
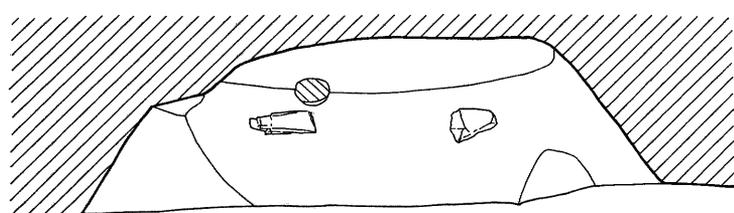


第6図 SD006出土遺物実測図（縮尺1/4）

(--- 赤変・黒斑等範囲)

りが確認できる。なお、胴部的一部分が粘土帯毎に分離して出土した。3は遺構検出時に溝部分の上面から出土したもので、位置はR番号を付して取り上げた遺物の周辺である。口縁部を僅かに残す胴部上位1/4程の破片で、口縁部は短く外傾し、胴部はやや強く張る。器面には粘土帯接合の凹凸が明瞭に残る。調整は胴部外面は刷毛目が施され、内面は頸部下からヘラ削りされる。4はR7として取り上げた壺である。胴部から底部にかけての1/2程が出土した。胴部は球状を呈し、底部には平坦な面部分を作る。胴部上半は粘土帯の凹凸が強く残る。調整は外面が刷毛目で仕上げられ、内面はヘラ削りが施される。5はR8・9として取り上げた甑である。約1/3を欠失する。復元口径25.2cm、器高23.9cm、底部径8cmを測る。口縁部はやや外反し、胴部上半は僅かに内傾し、把手部分に胴部最大径をもつ。調整は外面と内面口縁部は刷毛目で仕上げられ、内面胴部はヘラ削りされる。把手は一方しか出土していないが、ヘラで整形された後、丁寧にナデが施される。

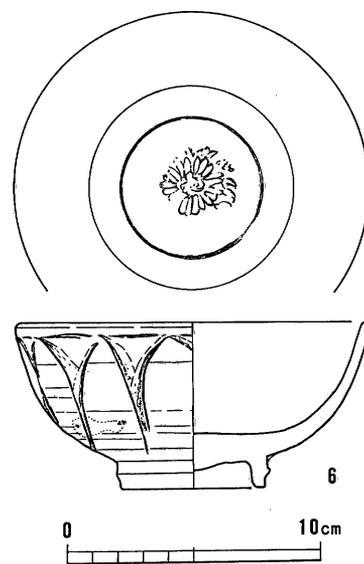
## 2. 墳 墓



第7図 ST011実測図 (縮尺1/20)

### ST011 (第7図 図版5)

遺構上面は153×115cmを測る不整楕円形プランを呈す。南側は一段高く、ステップ状となっており、床面は90~75cmの円形に近い不整形を呈す。埋土は焼土や焼床ブロックで充満していたが、遺構自体にはまったく焼けた痕跡は見られなかった。また、遺構内には棺の痕跡は認められなかったが、壁際に置かれた支石状の石と副葬品と思われる完形の青磁碗から墳墓と推定した。



第8図 ST011出土遺物実測図 (縮尺1/3)

### 出土遺物（第8図 図版7）

6は副葬品と想定される龍泉窯系青磁椀である。口縁部から体部にかけて半球状を呈し、高台は高く、外端を広く斜めに面取りする。文様は体部外面に蓮弁文を片彫りするが、弁は均一性がなく簡略化が著しい。また、内面見込みには花型を型押しする。胎土は灰白色を呈し、比較的良好である。釉は緑灰色の不透明なもので、全面施釉後、高台内底部と高台畳付けの釉を掻きとる。

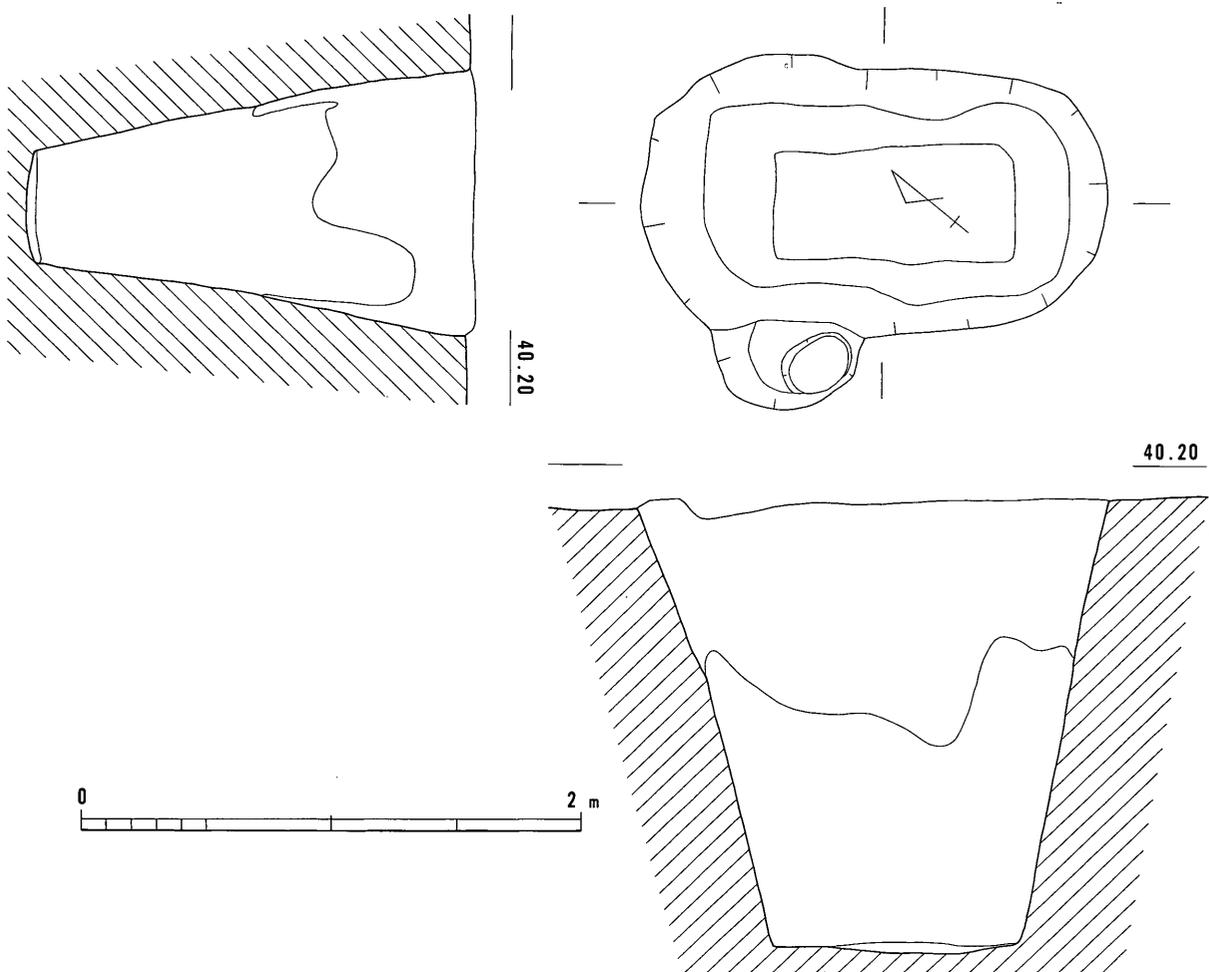
## 3. 土 墳

### SK014（第9図 図版5）

187×106cmの略楕円形のプランを呈す。床面は97×47～42cmを測る長方形プランを呈し、検出面からの深さは180cmを測る。床面は平坦で、壁体は上部が僅かに開き気味となるが、ほぼ直線的に下る。遺構の形状は墳墓・落し穴等を想像させるが、遺物の出土もなく、積極的な根拠が無いため土墳として取り扱った。

#### 出土遺物

遺物はまったく出土していない。



第9図 SK014実測図（縮尺1/30）

## 4. 不明遺構

### SX012

(第10図 図版6)

東端が確認できなかったが、長方形プランを呈すと考えられる。検出面での規模は長さ約11.4m、幅約5mを測り、壁高は最大130cmを測る。床面は整った長方形プランを呈し、長さ約10.3m、幅約3mを測る。床面や、壁の下半部に小さく、浅いピットが多く穿たれる。床面中央部に多い傾向はあるが、規則性はない。

### 出土遺物

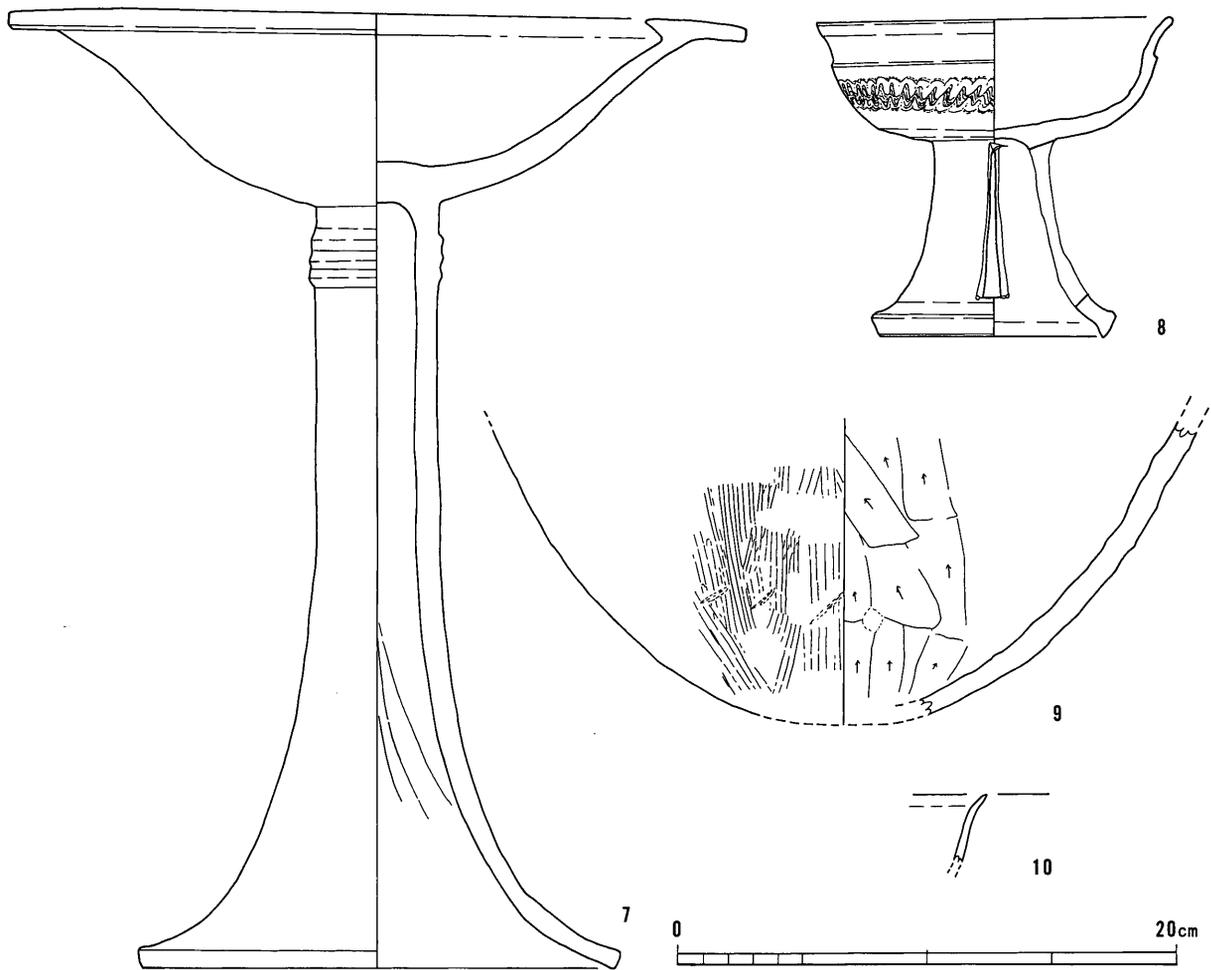
(第11図 図版8)

遺物は遺構の上位埋土から出土したのみで、下位からはまったく遺物の出土を見なかった。

7は遺構検出面から50~80cm程掘り進めた所から出土した弥生式土器の高坏で、8~9割が遺存していた。坏部は鋤先状口縁を呈し、口径29.4cmを測る。脚部は長く、器高37.9cmのうち30cmを占める。坏部との接合部直下に3条の断面三角形凸帯を連続して貼付する。裾部は脚部下位から緩やかに開き、底径18.8cmを測る。器表部分は既に失われているが、丹が塗ら



第10図 SX012実測図 (縮尺 1/80)



第11図 SX012出土遺物実測図（縮尺1/3）

れていた痕跡が認められる。8は20cm程掘り進めた所から出土した須恵器の無蓋高坏である。ほぼ完形に近い。口径14.2cm、器高12.6cm、脚裾径9cmを測る。坏部は口縁部が外反し、体部との境に明瞭な段をもつ。体部の中央には波状文を巡らし、その直下から回転ヘラ削りが認められる。脚部には4方に細長い透かしが設けられ、脚の端部は僅かに下方に引出される。9は土師器甕の胴部下半の1/5～1/6程の破片である。20cm程掘り進めた所から出土した。球状に張る胴部から底部は丸みをもちつつもやや平坦気味となる。外面は刷毛目調整され、内面はヘラ削りされる。10は白磁の細片である。50cm程掘り進めた所から出土した。胎土は灰白色を呈し、キメが細かい。釉は僅かに緑色を帯びる。

## IV ま と め

今回の調査においては、3次にわたる発掘調査で確認された弥生時代の墳墓は検出されず、一連の帯状の配置を取る墳墓群の北側は2次調査地点で終了することが確認された。また、2次調査では墳墓群の南側はもう少し延びそうな様相も示すが、国道3号線福岡南バイパスに伴う調査や3次調査の際の確認調査では遺構は確認されていない。このことから南側においても遺構は残存していないようで、いわゆる永岡遺跡の列埋葬と呼ばれる墳墓群はほぼ完掘されたといえよう<sup>註1</sup>。さて、本調査で検出された遺構について次に述べる。SD001とSD006は断面形状や埋土が類似しており、また、僅かな隙間を挟み台地の縁を回っている。これらのことから同時期のものと推測される。出土した土師器は、甕がやや外傾する短い口縁部、長めの球状の胴部、丸底であるが、僅かに平坦気味となる底部。甕も口縁部はやや外反するが、胴部はあまり張らずに、すっきりとした形状を呈す。これらの遺物に近いものとしては朝倉郡朝倉町に主体がある外之隈遺跡VII区の住居跡出土遺物がある<sup>註2</sup>。遺構からは土師器のほかに須恵器の坏等も出土しており、小田富士雄編年IIIb~IV期のものと思われる。土師器の甕は、時期が少し降ると口縁部の外反が強くなり、長胴化、平底化が進むようであり、SD006出土の甕は6世紀後半から7世紀初頭のものと推定される。

ST011は4個の支石と青磁椀から墳墓と考えたが、支石上面からは棺の痕跡等は見つけることができなかった。龍泉窯系青磁椀は大宰府編年の4類に分類されているもので、編年では大宰府土器型式XIX期以降、14世紀初頭から後半とされるものである<sup>註3</sup>。

SX012は長方形プランの大型竪穴式住居跡状を呈すが、遺構内部のピットは径が小さく、浅いもので、不規則に検出された。出土遺物も上位からに限られ、遺物の時期幅も長い。遺物量は少ないが、弥生式土器の高坏や須恵器の無蓋高坏はほぼ完形に復元できるもので、前者は須玖II式、後者は小田富士雄編年II期、陶邑TK15段階のものである。埋土に白磁細片等も見られる事から、中世以降に埋没したものと推測される。

### 註

註1 永岡遺跡については関連文献も含め「筑紫野市史」資料編(上)考古資料 2000 第一節「解説編」第3章「弥生時代」「永岡遺跡」に詳しい。

註2 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書-40- 1996 福岡県教育委員会

註3 大宰府条坊跡XV 2000 大宰府市教育委員会

# 圖 版



調査区遠景 (西から)



(1) 調査区近景 (北から)



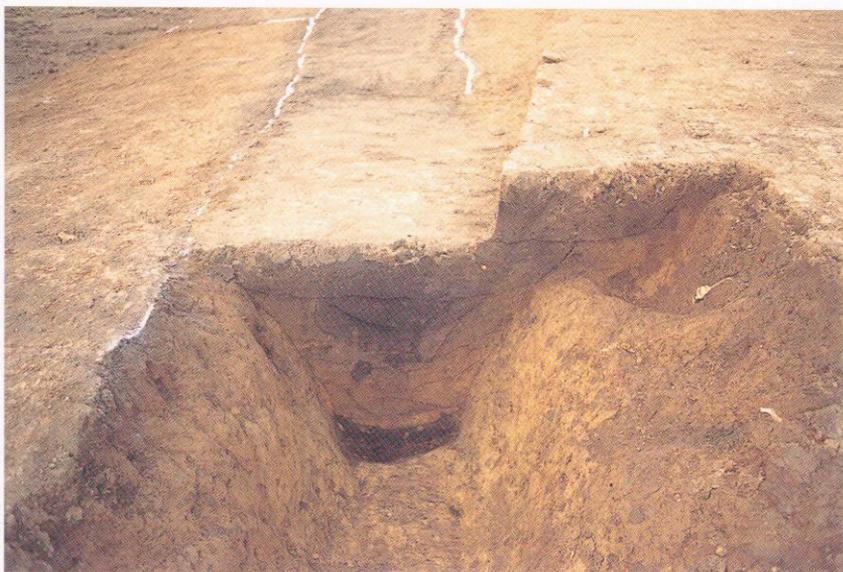
(2) 遺構配置状況 (上空から)



(1) SD001断面 (A-B)



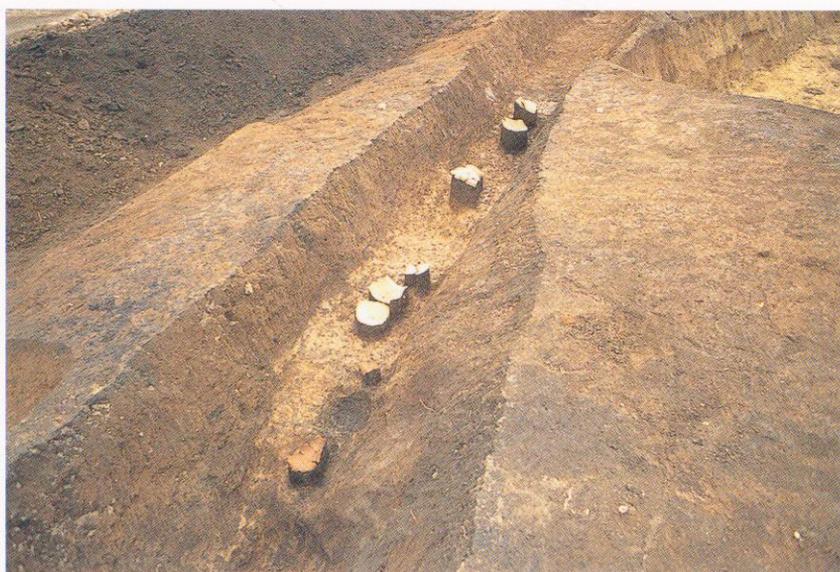
(2) SD006断面 (C-D)



(3) SD006断面 (E-F)



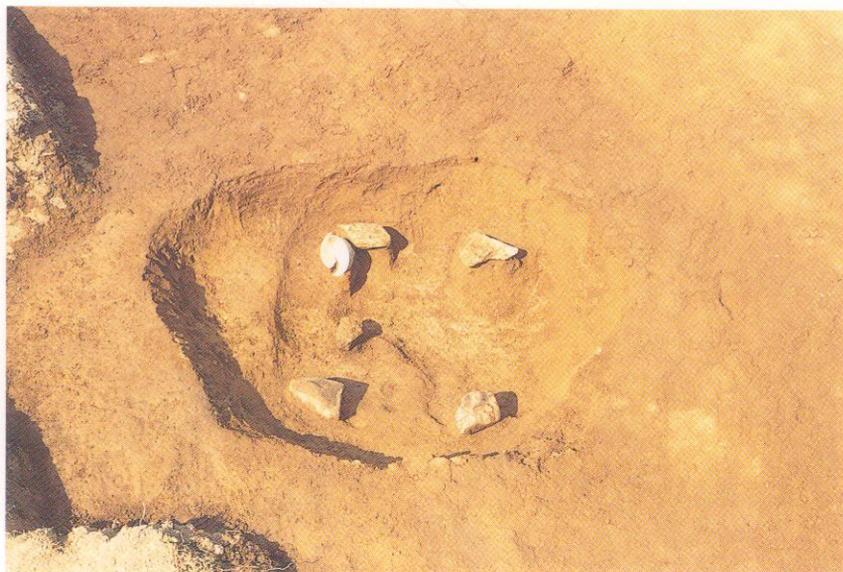
(1) SD006断面 (G-H)



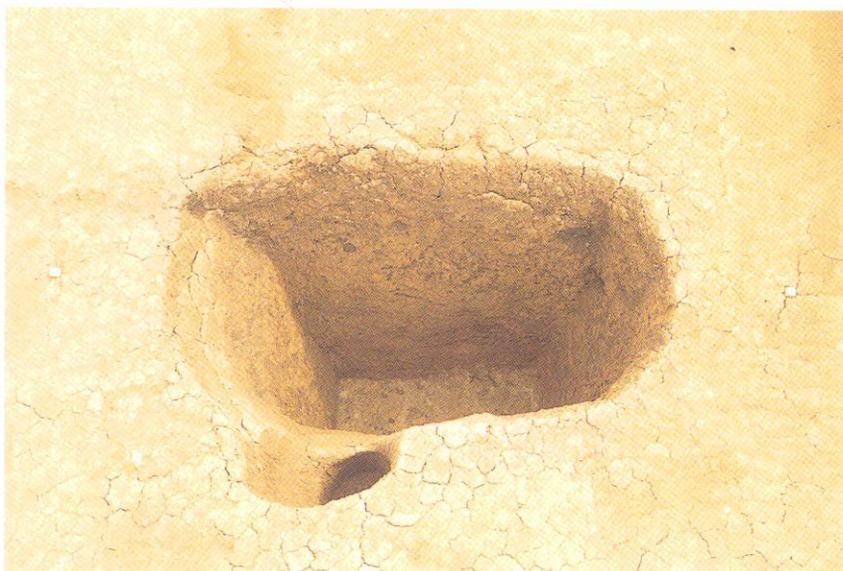
(2) SD006遺物出土状況 (南から)



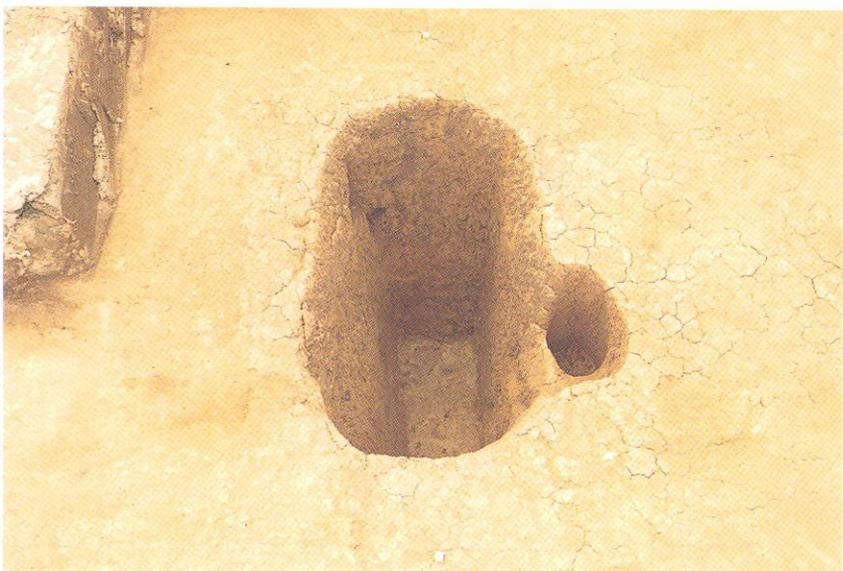
(3) SD006遺物出土状況 (西から)



(1) ST011 (東から)



(2) SK014 (西から)



(3) SK014 (北から)



(1) SX012 (上空から)



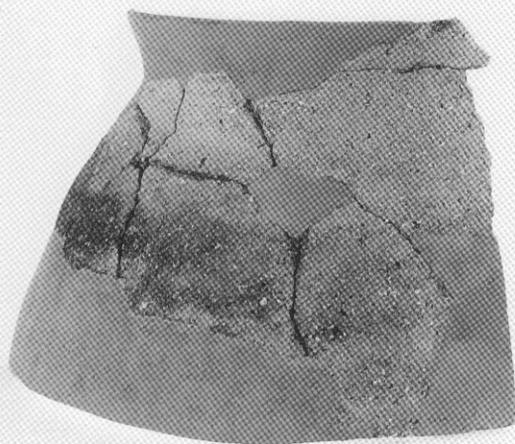
(2) SX012 (北から)



1



2



3



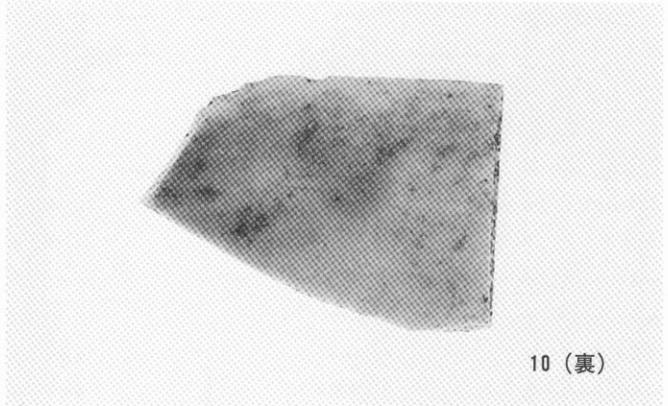
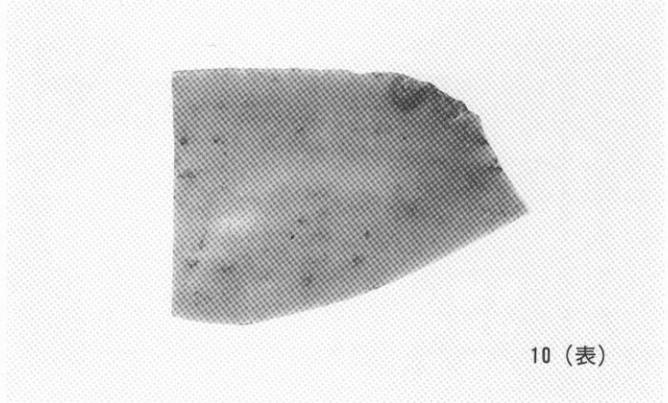
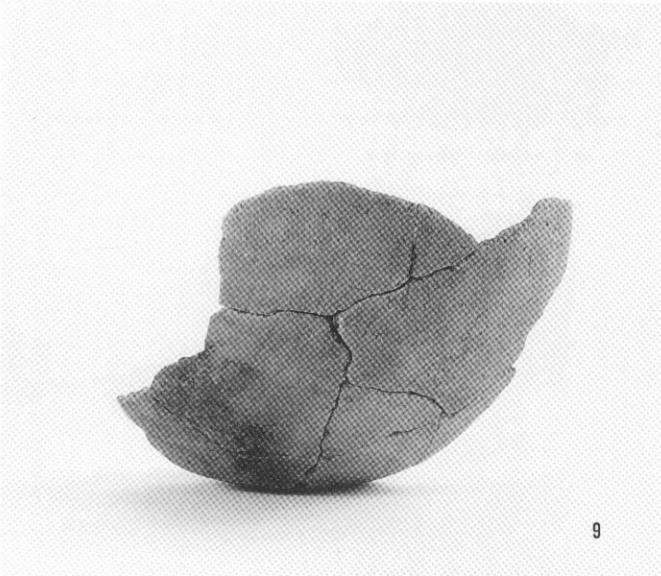
4



5



6



番号は挿図番号と同じ

# 報 告 書 抄 録

ふ り が な	ながおかいせき							
書 名	永岡遺跡							
副 書 名	永岡遺跡第4次調査							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	筑紫野市文化財調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第73集							
編 集 者 名	奥 村 俊 久							
編 集 機 関	筑紫野市教育委員会 (教育部 文化課 文化財担当)							
所 在 地	〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西一丁目1番1号 TEL 092 (923) 1111(代)							
発 行 年 月 日	平成14年3月29日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
ながおかいせき 永岡遺跡	ふくおかけん 福岡県 ちくしのし 筑紫野市 ながおか 永岡	402176	170119	33° 28' 21"	130° 32' 27"	000410 ) 000626	800	共同住宅 建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
永岡遺跡	墓地 ほか	古墳時代 室町時代	溝 墳 墓 不明遺構	弥生土器 須恵器 土師器 青 磁				

# 永岡遺跡

筑紫野市文化財調査報告書

第73集

平成14年3月29日

発行 筑紫野市教育委員会

〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西一丁目1番1号

TEL 092-923-1111(代)

FAX 092-923-9644

印刷 大同印刷株式会社

〒840-0815 佐賀市天神一丁目1番32号

TEL 0952-24-8450(代)

FAX 0952-28-5583

URL <http://www.daidou-jp.com>.